ホセア書

ホセアはイスラエルと南ユダ王国に分裂した
約 200 年後のイスラエル北王国に住んでいました
彼は北王国のことをエフライムまたはヤコブと呼ぶこともありました
ホセアはイスラエル史上最悪の王の一人
ヤロブアム 2 世の時代に神からのことばを語るように任命
されました

その頃北王国は混乱を極めていて
紀元前 722 年になると恐ろしい巨大帝国アッシリアが
イスラエルに攻め込んできて国を破壊しました
ホセアはその悲劇が迫りくるのを見ていたのです
ホセア書はそんな時代の 25 年間にホセアが語ったこと
書いたことを集めたものでほとんどが詩の形式です

3 つのセクションに分かれていますが
それぞれを詳しく見ていきましょう まず冒頭はホセアと
不貞を働いた妻ゴメルの結婚が破綻した話から始まります
ゴメルがほかの男性たちと関係を持ったのが結婚前からなのか
結婚後なのかはわかりません ただホセアと彼女の間には 3 人の
子供がいて その家庭は崩壊してしまいました

しかしここでゴメルの不誠実にもかかわらず神はホセアに
彼女を探しに行き彼女の恋人たちへの借金を払い
もう一度愛と誠実をささげよと言ったのです
そして破綻し修復された結婚子どもたちなどはすべて
神とイスラエルの関係を語るための預言的な象徴だと言いました

神はイスラエルに対して誠実な夫のようでした
奴隷だった彼らを救い出しシナイ山まで連れてきて契約を
結んだのです そしてイスラエルにも自分に対して
誠実であるように願いました しかし約束の地に導かれたイスラエル
はそこで神からの贈り物をたくさん
受け取っておきながらカナンの偶像バアルに捧げたの
です ですから神にはイスラエルとの

契約を破棄し離婚するもっともな理由がありましたし
そうすることも出来ました
しかし実際にはそうする代わりにイスラエルを改めて愛し
契約を新しくすることにしたのです

なぜでしょうか　それは彼の愛とあわれみと誠実
さのゆえです　ホセアはこのことについて詳しく
説明しています　神に反逆したイスラエルには
他国に侵略され捕囚にされるという報いが迫っていました
けれども将来回復されるという希望もあったのです

いつの日かイスラエルは悔い改め
神を礼拝するために戻ってくるでしょう
そして神は彼らの上にダビデの血筋のメシアなる王を立て
王は民に祝福をもたらすとホセアは言いました
つまりこの最初のセクションでこの書全体のテーマが紹介されている
のです　イスラエルは反抗しそれに対して
神は厳しい裁きを下すが神の契約の愛とあわれみはイスラエル
の罪に打ち勝つということです

続くセクションではホセアは詩を用いて
このテーマをさらに深く掘り下げていきます
イスラエルに対するホセアの非難と警告は
二つのセクションで語られていますが
そのどちらも神のあわれみと未來への希望に満ちた詩で締め
くくられています

4 章から 10 章では
ホセアはイスラエルの不誠実さの原因と
その結果について述べています　まずイスラエルには神に対する
知識と理解が欠けていると繰り返し言っています
ヘブル語では知ることをヤダアと言いますが
これは単に知識として知っているということではなく
個人的な関係において知っているという意味です
誰かについてただ知っているだけではなく
その人柄を深く知っているということです

神はイスラエルにご自分のことをそのように知って
ほしいと願っていました
神との個人的な関係の中で神の愛を体験し
心と生き方を変えるような知識
を身に付け自分のほうからも神を愛するよう
になってほしかったのです

だからこそホセアは
イスラエルの偽善的な礼拝を何度も非難しました
彼らが十戒を破り深刻な社会的不正を見逃しながら
聖なる神殿におもむき何も問題ないといった態度で犠牲
をささげることを繰り返し指摘したのです

しかし実は問題だらけでした 彼らは偽善的だっただけではな
く偶像礼拝もしていたのです ホセアは
ベテルとギルガルにあるバアルの祭壇について何度も言及しています
また彼らが偶像礼拝だけではなく
政治的同盟国のエジプトやアッシリアにも忠誠を誓っていた
ことを繰り返し責めています イスラエルは神の守りを信頼する
代わりに他の国々のように軍事力だけを
頼みとしたかったのです

そこで神はもうすぐそれがすべて自分に降りかかってくると言いました
というのもアッシリアは間もなくイスラエルに牙をむき
その国土を略奪するからです 警告を与えるもう一つのセクション
の中でホセアはイスラエルの歴史を引き合い
に出して彼らがいかに初めから不誠実だった
かを示しています

たとえば創世記 27 章と 28 章にある
ヤコブの嘘と裏切り民数記にあるイスラエルの荒野
での反抗サムエル記第一にある民を罪と
災難に導いた堕落したサウル王の話を例に挙げ
この民族に脈々と受け継がれる罪を指摘しました
それでは彼はどんな希望をもっていたのでしょうか

3 章を見ると神はご自分の民を救い
回復するために何かをするとありそれはこの 2 つの結びの章の中で
明らかにされます

11 章は感動的ですこの詩の中で
神は息子イスラエルを育てすべてを与えた父親として描かれて
いますが大人になった息子は父に反抗し
父の寛大さにつけこみました そのためこの詩に描かれる神の
心はかき乱されています ある時は怒りに燃え当然のこと
ながら裁きを下すと言います

しかし次の瞬間神の心は引き裂
かれ慈悲とあわれみの気持ちでいっぱい
になり愛する息子を赦そうとするのです

神は 8 節でエフライムを引き渡すことなどできない
あわれみで胸が熱くなると言っています
つまり神はイスラエルが罪の報いとして
アッシリアに征服されることを許しはしましたが
それで終わりではなくまだ希望が残っているのです
最後の章はそれについて述べています

ホセアはイスラエルに悔い改めて神に立ち返るように
呼びかけますが 彼らがそうしても長続きしない
と知っています 今までもそうでしたから
神はいつの日か彼らの頑なな心を癒し
思う存分彼らを愛すると言いました

そして癒されたイスラエルをしっかり
と根が下ろされ枝は広がり青々と茂り
涼しい木陰と果実を国々へ提供する木にたとえています

これは神がアブラハムに約束したことの象徴で
イスラエルがすべての国々に祝福をもたらすことを表しています
そして神はこれが実現するためには神の恵みと癒しの力が必要だと言って
います それによって堕落したイスラエル

の民の罪深い自己中心が癒され神の愛を受け取り神を愛することが
できるようになるからです これが神の約束なのです

この詩の後に付け足しのような最後の言葉が記されています
これはおそらくホセアの詩を集めた著者が
読者に言いたかったことなのでしょう
知恵がありこれらを悟る者はだれか
これらとはホセアの詩のことです
主の道は平らだ正しい者はこれを歩み
背く者はこれにつまずく
つまり著者はホセアが北イスラエル
に向けて書いた詩の内容は
過去に限ったものではないと言いたいのです
これは神の性質と目的そして人間の性質についての深い真理なのです
そして神は人間の罪を義をもって裁きますが
究極の目的はご自分の民を癒やして救うことです
これがホセア書です

どんな希望をもっていたのでしょうか
3 章を見ると神はご自分の民を救い
回復するために何かをするとあり それはこの 2 つの結びの章の中で
明らかにされます 11 章は感動的ですこの詩の中で
神は息子イスラエルを育て すべてを与えた父親として描かれて
いますが 大人になった息子は父に反抗し
父の寛大さにつけこみました そのためこの詩に描かれる神の
心はかき乱されています ある時は怒りに燃え当然のこと
ながら裁きを下すと言います しかし次の瞬間神の心は引き裂
かれ慈悲とあわれみの気持ちでいっぱい
になり愛する息子を赦そうとするのです
神は 8 節でエフライムを引き渡すことなどできない
あわれみで胸が熱くなると言っています
つまり神はイスラエルが罪の報いとして
アッシリアに征服されることを許しはしましたが
それで終わりではなくまだ希望が残っているのです
最後の章はそれについて述べています
ホセアはイスラエルに悔い改めて神に立ち返るように

呼びかけますが彼らがそうしても長続きしない
と知っています 今までもそうでしたから
神はいつの日か彼らの頑なな心を癒し
思う存分彼らを愛すると言いました そして癒されたイスラエルをしっかり
と根が下ろされ枝は広がり青々と茂り
涼しい木陰と果実を国々へ提供する木にたとえています
これは神がアブラハムに約束したことの象徴で
イスラエルがすべての国々に祝福をもたらすことを表しています
そして神はこれが実現するためには神の恵みと癒しの力が必要だと言って
います それによって堕落したイスラエル
の民の罪深い自己中心が癒され神の愛を受け取り神を愛することが
できるようになるからです これが神の約束なのです

この詩の後に付け足しのような最後の言葉が記されています
これはおそらくホセアの詩を集めた著者が
読者に言いたかったことなのでしょう 知恵がありこれらを悟る者はだれ
か これらとはホセアの詩のことです
主の道は平らだ正しい者はこれを歩み
背く者はこれにつまずく つまり著者はホセアが北イスラエル
に向けて書いた詩の内容は過去に限ったものではないと言いたい
のです これは神の性質と目的
そして人間の性質についての深い真理なのです
そして神は人間の罪を義をもって裁きますが
究極の目的はご自分の民を癒やして救うことです
これがホセア書です

500 字要約

ホセア書は、イスラエルと南ユダ王国に分裂した約 200 年後のイスラエル北王国の混乱とアッシリアによる攻撃を背景に、神との契約を通じた愛とあわれみを伝える詩的な書物です。ホセアは妻ゴメルとの破綻した結婚を通じて、神がイスラエルに対して示す忍耐と再生のメッセージを伝えました。イスラエルの偽善的な礼拝や不誠実さを非難し、神の愛が罪に打ち勝つことを強調しています。ホセア書は希望と回復のメッセージを掲げ、神がイスラエルを救い、愛と癒しをもたらすことを示しています。